

## 小特集

### 公開合評会

## ドゥルーズ，フーコー，小泉の靈性

—— 小泉義之著『ドゥルーズの靈性』をめぐって ——

小泉義之著『ドゥルーズの靈性』は、2019年6月、河出書房新社より刊行された。

1991年から2019年まで、ほぼ30年に及ぶ年月のあいだに書かれ、発表された15本（ただし1本は書き下ろし）の論文から成る本書は、デビュー作『兵士デカルト』（1995）以来、我が国の哲学界を牽引し、鼓舞し続けてきた著者が、妖しささえ湛えるその鋭利な知性の鋒で斬りひらいてきた思考の地平を、豊潤かつ重厚なパノラマのように私たちの眼前に描き出す。いや、突きつける。

その巻頭と巻末を飾る論考が、それぞれジル・ドゥルーズとミシェル・フーコーにおける「靈性」概念の考察に捧げられていることは、読む者の思考を撻らずにはおかない。20世紀フランス思想の栄華の頂点といっても過言ではないこの二人の哲学者が、かたや映画的知覚に触発された思考が獲得する光速の運動として、かたや真理に到達せんとする主体がおのれ自身に変容を刻む実践として、まったく異なる角度から「靈性」を捉えながらも、前者は「宇宙的で靈的なざわめき」への到達としての〈生〉へ、後者は統治を拒絶する主体が蜂起への疾走のなかで垣間見る「別の真なる生」へ、つまり、いずれの場合にも彼岸の生ではなく、彼岸ならざる別の生へと、それを昇華させたことに、小泉氏のアクチュアルな関心が注がれていることがひしひしと伝わるからだ。

2017年4月に小泉氏を班長に発足した京都大学人文科学研究所・共同研究「ミシェル・フーコー研究——人文科学の再批判と新展開」の会合でも、フーコー晩年の思想を独特に彩る「靈性」の概念は、当初から折に触れて班員相互の議論の的になっていた。小泉班長自らのご配慮で、班員全員の手元にご新著が届けられた後の例会（2019年7月もしくは9月）の席で、どこからともなく「合評会」のアイデアが持ち上がったのは、それゆえ、いわば自然な流れだった。評者（コメンテータ）は、本研究班の事実上もうひとりのリーダーである市田良彦氏、そして本研究班が誇る二人の気鋭のドゥルージアン、廣瀬純氏と千葉雅也氏に務めてもらうことが決まった。

合評会は、2020年1月26日、本研究班のホームグラウンドである人文科学研究所本館大会議室にて、およそ70人の聴衆を集めて催された。本研究班がオフィシャルな活動を終える2020年3月を目前に控え、この催しは本研究班最後の公開イベントのひとつとなった。しかし同時に、本合評会は、小泉氏の立命館大学ご退職をひと足早く記念するセレモニーの役も果たしたように思う。COVID-19のパンデミックの影響で、それからほどなく、年度末の大学の風景がいかに一変したかを思えば、この「ひと足早く」が生んだ幸運は大きかった。小泉氏のご退職に僅かばかりでも花を添えることができたのは、人文研の誇りである。

合評会当日の三評者のコメント（発表順）と、それにたいして新たに書き下ろされた小泉氏の応答を、以下に収録する。

（立木康介）